- (4) Fracture of the left ilium.
- (5) Fracture of the left acetabulum of hip.
- (6) Fracture of the left ischium.
- (7) Fracture of the left femur.
- (8) Fractures of the lower end of both the tibia and fibula in left.
- Fracture of the anterior margin of the left tibia.
- (9) Fracture of the lower end of the left radius.

電氣衝擊療法による肩甲骨々折の 1 例

国立小倉病院 整形外科 小 山 次 雄
精神科 河 村 重 雄

1. 緒 言

電氣衝擊療法（以下 E-S と略す）が開始されたのは、比較的近年に属し、我国に於いては 1939 年安河内氏らによつて初めて行われたものである。本療法によつて偶発した骨、関節の障害は Herskovitz が 1940 年より 1942 年迄の間に 174 例 E-S を行つた中で、6 例を報告したのが最初である。我々は最近本療法による右肩甲骨々折の 1 例を経験したので、茲に報告し諸賢の御批判を仰ぎたいと思う。

2. 症 例

患 者 49 才の男子
主 訴 右背部の疼痛及び右上肢運動障害
原因経過

昭和 29 年 4 月 8 日鬱病の診断の下に当院精神科に於いて、初めて E-S をうけた。その直後より右背部に鈍痛を覚える様になつたが、その日はそのまま帰宅した。しかし、仰臥及び右側臥が困難となり且又、右上肢の運動障害を呈するに至り、同月 10 日当院整形外科を訪れた。

家 族 歴 特記すべきことなし。

既往歴

昭和 28 年 10 月鎖骨々折をした他は著変を認めない。

初診時所見

体格栄養は共に中等度、胸腹部に著変を認めず。脊柱に変化はなく、右背部肩甲骨部に軽度の腫脹を認め且該部に圧痛を著明に訴う。

右肩関節運動は前方挙上 85°, 側方挙上 65°, 後方挙上 30° に夫々運動制限されている。

レ線所見

右肩甲下角は稍々外方へ転移し、椎骨縁の下方より肩甲棘の略中央へ向う骨折像を認む。

治 療

右上肢外転挙上位にギプス包帯を施行し、約 5 週後にギプスを除去したが、何ら運動障害を残さず治癒した。

3. 考 按

E-S による骨、関節障害の報告は、前述の様に本療法が比較的新しいものであるだけに決して多いとは云われず、2, 3 の諸家の報告によると「表 1」のようにその頻度もまちまちである。この発生時期は「表 2」の如く、初回及び第 2 回以内に起る率が多い様である。

次に障害部位は脊椎の圧迫骨折が大多数を占め、他の部の障害は甚だ僅少である。御巫氏は 104 例の障害患者中、97 例は脊椎骨折で、残りの 7 例は何れも上肢帯障害であつたと報告している。即ち、筋挫傷 1 例、肩関節前方脱臼 2 例、上腕骨小結節骨折 1 例、両側肩甲骨々折 1 例、肩関節後方脱臼 2 例である。

発生機転に就いては、森田氏は脊椎骨折は、全軀幹筋の収縮によつて脊柱の長軸に対する圧力が生じ、この際に頭部及び頸椎が上位胸椎に対して下向する槌撃的作用を行い、椎体の上面を凹まし、その後に楔状椎になると記し、御巫氏は更に異常な痙攣のあるときは、上肢帯骨折などもおこり得ると云う。

我々の経験した肩甲骨々折の発生機転は、只1例であるので推測の域を脱し得ないが、恐らくは菱形筋及び円形筋の異常攣縮によるものと思われる。予防としては現在の処クラール投与以外みるべきはなく、例えクラールを用いても E-S による骨、関節の障害の絶無を期することは困難の様である。

の右肩甲骨々折の1例を報告したが、この E-S は精神科領域の治療面に不可欠なものであるだけに、これが実施に当つては E-S によつて偶発する種々の障害を最小限度に喰い止めるべく予防的処置を行い、殊に初回のものには発生率も多いので、出来るだけ保護的に行うことが必要である。

4. 結 び

我々は第1回目の E-S によつて生じた 49 才の男子

On a Case of the Fracture of the Scapula caused by the Electro-Shock Therapy.

By

Tsugio Koyama

Department of Orthopedics,
Kokura National Hospital.

et

Shigeo Kawamura

Department of Psychiatry,
Kokura National Hospital.

The authors experienced a case of the fracture of the right scapula by the first electro-shock therapy in 49 years man. The fracture healed without any functional troubles by the plaster of Paris bandage in the abducto-upper position of the upper limb. This mechanism would owe to the abnormal contraction of the rhomboideus and teres muscles.

As might be necessary to the treatment of the psychiatric area, the electro-shock therapy must be forced with precautions not to bring a disturbance of bones and joints. And as for the therapy, there happens less disturbance than the first time, it would be the most important matter to manage one protectively.